おんなの座

――昭和三十年代に輝いていた日本の女性たち――

西野知成

昨夏、四十年にわたり住み慣れた旧居を取り壊し小さな新居を建てて移り住んだ。そこに待望の吹き抜けの書棚を作り、梯子を備えた。いままで座敷に積まれつづけて、日の目を見なかった書籍・資料の一部がカラフルな背表紙を再び見せはじめた。ソファに横になり、ぼんやりと眺めていると、過ぎ去りし五十年の足跡が浮かび上がる。とくにテレビの創成期、昭和三十五年から三十七年へかけて、私が情熱をかけた番組『おんなの座』の深紅色に金字の台本集五冊が目にとまる。忘れ難い思い出の数々が詰まっている。

『おんなの座』は当時最も輝いていた日本の女性を一週間に一人、各分野からご登場いただき、その半生を浮かび上がらせる生番組である。二年間で約百人。いまも手元にそのアルバムの数々が残る。ナレーションは岸田今日子さん、きき手は当時慶応大学の中国文学の奥野信太郎教授にお願いした。

これから折りに触れ、往年のフランス映画『舞踏会の手帳』ではないけれど、当時のこころの恋人（?）たちを再び訪ねてみようと思うようになった。

その一　高岡　智照

昭和三十六年晩春の昼下り。雨があがったばかりの祇王寺への坂道は、緑の葉が輝いて眩しく、あたりは静寂そのものであった。私の近づく足音に山門の人影がハッと飛び離れた。恋人であろう若い男女の抱擁のさ中の出来事であった。いまほど訪れる人のないこの辺は、たぶん絶好のラブ・スポットであったのだろう。

庵の入り口で、東京のテレビ局から庵主さんを訪ねてきたことを告げて、玄関の上框（あがりかまち）で待つことしばし、私は、その横にそっと置かれた茶杓（ちゃしゃく）の箱の上に書かれた一句に目を奪われた。「戯れに叩きたまふな花の門」。これが庵主さんとの出会いである。

その夏の盛り。カメラマンを連れて再び嵯峨野を訪ねた。庵主さんの日常をフィルムに納めるためである。墨染めの衣を透して浮き出た見事な白の地紋。この日のために歯医者さんに通ったという庵主さんの白く整った口元が美しかった。その時、庵主さんは六十半ばをとうに過ぎていた。カメラを通して見る立ち居振る舞いは、まさに「おしゃれな女」そのものだった。剃髪がかえって女のひとの

年を隠すということに気がついた。

仏前に座し、仏に手を合わせる庵主さん。その時、中庭から黒揚翅がはらはらと縁側に近づいてきた。私はカメラマンの肩を叩き、その情景を捉えるサインを送った。仏間に近く、つかず離れず戯れるごとき大きなつがいの黒い蝶。その動き、その行方を追う老尼。きゃしゃな体の中にいまだ残る突き上げてくる熱きもの。その目が爛爛と輝いていた。

その秋。お供の女性と庵主さんが東京にやって来た。スタジオの受け入れ体制は万全。セットは二条城の居間を拡大した写真パネルで、きき手の奥野信太郎（故人）さんとの対談の座敷を囲んだ。ひときわ見事な墨染めの衣に身を包んだライトの中に浮き上がる庵主さん。その目線に色香を漂わせるかのように、舞台の上の名優さながらの立ち居振る舞いであった。番組は大成功だった。

それから公私にわたり永年親しくしていただくことになる。関西方面へ出かければ必ず京都に宿をとり、祇王寺を訪ねた。珍しく上京の折りには東京でお会いした。

あれは確か夏の日の午後。人影のない祇王寺の中は薄暗く、雨戸を閉めた仏間に黒塗りの膳に、青く茹でたえんどう豆が小皿に少々とビールが運ばれた。私が喉を潤す間、お酌は傍らの世話係の老人に任せ、墨染めの衣に身を包んだ庵主さんは、仏間の隅にただ姿勢を正して静かに座するのみ。その目と口元には色香さえ漂わせ。心地よい酔い。その一瞬、私は名妓を傍らに侍らせているのではないかという至福の錯覚にとらわれた。

アメリカ留学の報告に、祇王寺を訪ねたときのこと。日当たりのいい仏間の縁側で、両切り太巻きのキャブスタンのネイビーカットを缶から取り出して、美味しそうに吸いながら、かつて一世の相場師と形ばかりの結婚をしてアメリカへ渡り、ハイスクールで念願の学生生活を味わったときの想い出を楽しそうに話してくれた。帰りに英語の本を二冊いただいた。

それから時候の挨拶など、お便りをいただいたり、ご報告したり。平成五年の末、母の死をお伝えするために、そのときの私の心のメモ「喜代一代記」をお送りしていたので、平成四年、九十七歳のお年賀をいただいたのが手元に残る最後のものになった。

数あるアルバムのなかでも、剃髪前の庵主さん「新叶家（しんかのうや）照葉」はベスト3にはいるほどの絶世の美人。三十九歳で仏門にはいるまでの波乱万丈の人生。それから六十年。その安住の地は、昔、平清盛の寵愛を受けた白拍子の祇王が、その愛を同じ白拍子の仏御前に譲り、尼となって庵を結んだと伝えられる嵯峨野の祇王寺。舞台としてはまたとない絶好の場所である。

昔のテレビ番組に触れるとき、私はいつも『おんなの座』の高岡智照尼の話をする。その数奇な運命、照葉から智照尼への女の一生は、いまどきの教室の若い女子学生には「超オシャレ」と写る。実は私もそう思う。

瀬戸内晴美さんの小説『女徳』の第一章は「黒い蝶」からはじまる。その瀬戸内さんも剃髪して、名を寂聴と改め祇王寺から道ひとつ隔てたところに寂庵を営む。不思議といえば不思議なご縁である。

その私も庵主さんが智照尼として祇王寺で過ごした法臘（ほうろう）の年をすでに越えた。

翌年、智照尼・九十九歳の死が伝えられる。その暮。祇王寺から贈られた自筆の一句

「身の秋や仏に甘えたき心」。

本文一部、追悼集『遠花火』（かまくら春秋社）より。

「おんなの座」の出演者リスト

淡谷のり子
山田五十鈴
平林たい子
長谷川春子
清川　虹子
江上　トミ
円地　文子
杉村　春子
藤原　あき
伊東　絹子
笠置シズ子
川辺るみ子
森田　たま
大江美智子
大塚　末子
小暮実千代
愛親覚羅浩
畔上　輝井
幸田　　文
三益　愛子
福島　慶子
吾妻　徳穂
戸塚　文子
閑院　直子
神近　市子
春日野八千代
輪島　昭子
水の江滝子
望月　優子
町　　春草
沢田　美喜
今井久仁恵
壷井　　栄
村山　りう
飯田　深雪

東山千栄子
鴨居　羊子
ミヤコ蝶々
千　嘉代子
千　登三子
松尾ちよ子
入江たか子
宮城まり子
久松喜世子
遠山　きく
佐藤　美子
轟　夕起子
藤間　　紫
中村　汀女
田中　澄江
淡路　恵子
吉田　史子
桃山　佳子
高岡　智照
泉　　園子
栗島すみ子
藤沢　嵐子
佐多　稲子
島本　久恵
菊田　澄江
三浦　光子
森　　光子
松田　妙子
吉屋　信子
松本　弘子
奥　むめを
高峰　秀子
若山喜志子
河原崎しず江
朝倉　　摂

大原　富枝
小桜　葉子
池内　淳子
黄　　小娥
岡田茉莉子
犬養　道子
山本　安英
瀬戸内晴美
川喜多かしこ
石井　好子
鳩山　薫子
草笛　光子
宮田　文子
小倉　遊亀
藤間　正子
森　　英恵
田中　絹代
松尾　和子
三岸　節子
土方　梅子
大関　早苗
花柳　小菊
三宅　艶子
高峰三枝子
武原　はん
加藤シズエ
高杉　早苗
安藤　鶴代
乙羽　信子
浪花千栄子
飯田　蝶子
葦原　邦子
杉野　芳子
水谷八重子